S. Ashina

＜キリスト教思想史――古代から中世・宗教改革＞

０．オリエンテーション――宗教と文化
１．キリスト教の成立と初期キリスト教
２．キリスト教教父１――使徒教父、弁証家
３．キリスト教の国教化
４．三位一体論の形成過程とその意義
５．研究発表１：齋藤、田中 11/19
６．修道制の展開 11/26
７．キリスト教教父２――アウグスティヌス 12/3
８．中世キリスト教世界のダイナミズム 12/10
９．キリストと文化――スコラ的文化総合 12/17
10. 研究発表２（「キリスト教学研究室」にて）：張、立川 12/24
11. 自然神学と歴史神学 1/7
12. イスラームと１２世紀ルネサンス 1/14
13. 宗教改革と近代世界（「キリスト教学研究室にて」） 1/21

＜前回＞キリスト教の国教化

A．キリスト教迫害と正統教会への道

（１）ローマ帝国の迫害のキリスト教

犯罪者として処刑されたイエスとその運動の後継者としての初期キリスト教会。
対決は不可避的であったが、それは何をもたらしたのか。

１．迫害下のキリスト教（１～３世紀）：この間にキリスト教の原型が完成した。
２．ユダヤ教から継承したもの：1)終末思想　2)黙示的終末論
３．迫害・抵抗文学 → 象徴、暗号
５．ローマの平和か、神の平和か（二者択一）
　ローマの平和（Pax　Romana）：政治と経済による上からの支配、そのもとでの秩序＝平和。
６．ヨハネ黙示録：バビロンと新しいエルサレムの対立。
７．キリスト教はこの対立の中で、ローマの秩序を利用することによって拡大し、ローマとの妥協に至った。

（２）迫害から公認・国教化へ

８．迫害（規模も期間も様々、棄教者の問題）
９．キリスト教の公認と国教化：このとき歴史は動いた！
313：ミラノ勅令（コンスタンティヌス大帝）
325：ニケア公会議　　361：背教者ユリアヌス帝即位。
381：コンスタンティノポリス公会議
392：国教(テオドシウス帝)

B．キリスト教の公認と国教化の意味

（１）公認・国教化の意義

１．キリスト教の公認と国教化
２．政治的秩序と宗教的秩序の相補性
　天上の秩序と地上の秩序、天の統一と地の統一（上と下との照応性、照応の論理）
　↓
　政治神学　　cf. 近代的な政教分離
３．政治的要請としての「正統―異端」論争
　宗教的要因との関連性の問題
　多様性を保持しつつ、異端との対応で徐々に正統教会へ
　・近代日本におけるキリスト教合同問題

・ポスト・プロテスタント時代のキリスト教
ティリッヒ

４．三位一体論との内的連関

（２）国教化の帰結

５．国家神学・政治神学としてのキリスト教神学
「神学」：キリスト教の発明ではない。古代ギリシャ起源。
ストア哲学の神学区分（アウグスティヌス）：
民衆の神学（神話）／国家の神学（ポリスの国家儀礼）／自然の神学（哲学）
↓
キリスト教による「神学」の変革
キリスト論の意義（芦名定道『自然神学再考』晃洋書房）

６．「国家の神学」を組み込むことによって、キリスト教神学の成立過程は完了した。

７．絶対平和主義（軍隊の宗教性）から正戦論（アウグスティヌス）へ、そして聖戦論へ。
キリスト教の国教化は、国家に対する教会の関わりについて再考を迫ることになる。
パウロの国家論の意義（宮田光雄）

８．アウグスティヌスの「神の国」論

９．現代的問題：キリスト教と公共性
国教会体制後の政治的状況で、なおも、正戦論にとどまるのか。
国民国家・民族主義を超えた普遍性の実現を試みるのか。
↓
下からの公共性、ネットワークとしての公共性

４．　三位一体論の形成過程とその意義

０．三位一体論の意義
・古代キリスト教思想のパラダイム
・国教会＝正統教会の基盤となる教理→その後のキリスト教世界の基礎
・独裁的絶対的な神理解への批判契機（モルトマン）、多様性の保持

（１）三位一体論の形成と正統・異端

１．歴史的コンテクスト：国教化→政治宗教・政治神学
正統教会―正統教義―正典化

２．国教体制：宗教と政治の相互補完、帝国の統一のための宗教の統一（正統教会の成立）

３．ニカイヤ公会議(325)における決定と争点：
父と子のホモウーシオス（同本質）
アレイオス派とアタナシウス(～ 373)派

４．異端：養子説・仮現説・様態説→三位一体論とキリスト論との錯綜した議論・論争
・養子説(Adoptionism)：イエスは単なる人間であったが、神の子として受け入れられた。
実際は、かなり多様な議論が養子説に関連する。
子の神性と父の神性には存在論的な差がある（従属説、オリゲネス）
・アレイオス：子は時間の内で創造された有限的な被造物
まだ子の造られなかった時があった
→　子の神性の不完全、人間の救済が危うくなる
→アタナシウス：父と子の同本質(homoousia)
初期のユダヤ人キリスト教の流れにおける、エビオン派（ナザレ人主義）
デュナミス的モナルキア主義（三一論）
・仮現説(Docetism)：イエスが人間と同じ本質を持つことを否認して、十字架の苦難は仮

にそう見えただけのことであるとする。グノーシス主義のキリスト論。
・様態説（Modalism）：３世紀の半ばのサベリウス、サモサタの司教パウロ
一神教的伝統の文脈
神の単一性を強調、父と子と聖霊の連続性を強調
同じ神の三つの様態
↓
「キリストはだれか・何者か」、キリストと神（父なる）との関連
キリストにおける神の働きと救済の確実性
神の唯一性
旧約聖書と新約聖書の関連性の問いでもある。

（２）正統教義：三位一体論（キリスト論）

５．ドグマ（教理）とは
(1)防御的意図：何であるかよりも、何でないか（異端への防衛）
(2)実践的意義：救いの確実性をめぐって（キリスト論における救済論的意味）
① 救済論的意図
② 論理的整合性、という二つの要求

６．三位一体論の前提（ティリッヒ『組織神学・第１、３巻』新教出版社）
1.宗教史－類型論
2.神的生命（生きた神）の経験
3.キリスト論

７．神は、父・子・聖霊の三つのペルソナ（位格）と一つの本質の三位一体の存在。
東西教会における表現のずれと解釈の幅
本質 位格
西：substantia ----- persona
東：ousia -----hypostasis
↓
東西教会の分裂。アウグスティヌスの三位一体論
三つのペルソナの共通の神的本質から出発。この神的本質＝原理の内部で三者は永遠の関係としてのみ区別される。父と子は相手を介して自らを認識しその相互交流から人格化された愛として聖霊が出てくる。
ニケア信条へのラテン教会の追加、「子からも」

８．内在的三位一体と経綸的三位一体
神自体 神の歴史的顕れ・活動（ヒエロファニー）
象徴、儀礼（サクラメント）

９．一神教的な伝統とイエスの神性の経験との統合の試み

（３）古代キリスト教パラダイムの意義

10．古代地中海世界の文化的政治的状況への適応＝ヘレニズム世界への土着化
＝正統的なキリスト教の確立
ヘレニズム的なもののキリスト教神学への受容
聖書正典の完結、教会の信仰の伝統、君主的な司教職、
聖書解釈への中期及び新プラトン主義的思考の適用。

11．キリスト教、キリスト教神学の変貌：
神の人間との根本的二元論（霊と身体）、この二元性の「神人」キリスト教を通しての克服。
↓

イエスの十字架・復活から受肉へ重心が移る。
聖書の物語的語りから宇宙論的ビジョン・存在論的な概念表現へ
神の歴史的な活動から神それ自体における永遠性へ
これはキリスト教の逸脱か？

12. 三位一体論の政治的含意

モルトマンの解釈：地上の絶対君主に対応する神の「一性」に対する「三」の保持
モナルキア
帝国のイデオロギーとしての神学に対する批判としての三位一体論

13. 古典的信条の定式化の規範性、あるいは相対性

キリストが神であり人間であるとすれば、古典的信条の定式は規範的でありかつ相対的、また聖書テキストも正典であると同時に人間的文献。
↓
古典的信条の定式を聖書テキストによって相対化する。
聖書テキストを人文学的諸方法による聖書学によって批判的に読む。

14. 古典的定式の改訂の試み（現代）

・バルト、ティリッヒ
・プロセス神学
・「弱い神」の系譜、北森嘉蔵・・・

ポイントは、聖書学的研究。聖書の規範性。

＜参考文献＞

１．ティリッヒ　『キリスト教思想史講義』（ティリッヒ著作集別巻二）白水社。
『組織神学』新教出版社。
２．マルー　『キリスト教史２・教父時代』講談社、平凡社ライブラリー。
３．ペリカン　『イエス像の二千年』講談社学術文庫。
４．シュミット　『政治神学』未来社。
５．Ｊ．モルトマン、Ｊ．Ｂ．メッツ　『政治的宗教と政治的神学』新教出版社。
６．モルトマン『三位一体と神の国』新教出版社。
７．アガンベン『ホモ・サケル――主権権力と剥き出しの生』以文社。
『王国と栄光――オイコノミアと統治の神学的系譜学のために』青土社。
８．ハンス・キュンク『キリスト教思想の形成者たち――パウロからカール・バルトまで』新教出版社。